

# 茶の湯文化学会会報 No.46

第46号 / 2005年8月25日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270  
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314  
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

## 山上宗二の歌「住むところ」

山下桂恵子

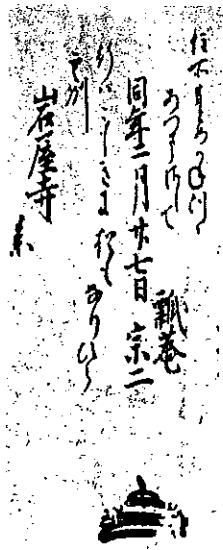
昭和五十五年（一九八〇）秋、東京国立博物館で特別展「茶の美術」が開催（同五十九年三月、『特別展図録 茶の美術』が刊行）され、そこに始めて表千家本『山上宗二記』（以下、『宗二記』）全文の写真図版が公開された。このおりに私は、『宗二記』の写真図版全文を拡大コピーして読み始めた。

やがて平成四年（一九九二）十月、「山上宗二記」を贈られた「宗程」という一文に成果の一端を記したが、そこに岩屋寺和尚を介して同寺の檀那三沢宗程に贈呈したものと記した。そのおりに触れなかつたが奥書に、

…次 醫乘院是非共 宗程様と尊老へ可奉送  
由、達而被申候条随「意見」者也、今日東路指テ  
罷下候、御披露奉憑候、仍如件、（返り点、ルビ  
など、『特別展図録 茶の美術』写真図版に依る）

と、岩屋寺和尚への依頼状が記され、続いて掲題の「宗二の歌」が次のとおり日付・署名を挟み、割書きの形に記されている。

この歌を私は、  
住所もとめかねつゝあつまさして  
行ハニしきに猶もなりひら



と読んでみた。ちなみにこの歌は、「武田家乙本」には見えるが、管見した他の諸本には見えない。  
ところで、この歌を採り挙げた論文が次々に発表され、管見ものの全部が、  
住むところもとめかねつゝ東さして

行けば乞食に猶もなりひら（傍点筆者）

と読まれているので疑問となった。「こしき」といわれてみれば「三」の文字は平カナの「こ」とも読める。そこで、写真図版から片カナの「三」と平カナの「こ」の、宗二の書き癖を調べてみた（永島福太郎先生の御教示）。片カナの「三」は約六〇〇字、その多くが右肩下がりで上下の字画の長さは等しく書かれており、

迷わず「二」と読める文字が多いが、前後の文脈を考えなければ「二」とも読めるような文字が四字あった。

次に、平カナの「二」は十二字と少なく、すべて下の字画は上より長く「これ程ナル」と「このおとし」の「二」を除けば、すべて下の字画には丸みがあり、「行けば二しきに」と読んだらあいの「二」に該当する文字は見当たらなかった。ここでこの歌を、

住むところ求めかねつつ東さして  
行けば錦に猶もなりひら

と読むことを提案したい。宗二の歌は『伊勢物語』を踏まえたものであろう。宗二は自ら物語の登場人物に重ね合わせ、わが身は秀吉政権下でさすらいの身、今は住むところもないような境遇になってしまったが自分も歌のふるさと「あずま」へ行こう、そうすれば錦を飾る折もあろう、と詠んだのではなかったらうか。しかし、歌の成立事情の詳細は私にはわからない。宗二は右の歌に続けて、

牢人之難儀者、雖其数々<sup>ニ</sup>候、少<sup>ハ</sup>業<sup>ト</sup>  
御座候、国々名所旧跡可令一見候、其上富士・浅間・武蔵野・奥州平泉迄<sup>ト</sup>任足候、送りカナ、『特別展図録茶の美術』写真図版に依る)

卿になったため中書王とも呼ぶ。父は後醍醐天皇、母は平棟子。建長四年(一二五二)四月、六代將軍に任ぜられた。將軍とはいえ、政治の実権は北条氏が掌握し、そのため親王は学問と和歌とに情熱を傾けた。文永三年(一二六六)六月、親王の室と子供たちが御所から出され、親王自身も七月四日、帰洛の途につかされた。幕府への謀叛を企てたため『鎌倉北条九代記』は記すが、成人した親王の存在を危険視し、北条氏が追放したというのが真因であろう。家集に『文応三百首』『柳葉和歌集』『瓊玉和歌集』『中書王御詠』『竹風和歌抄』がある。

親王の「いかがせん」の歌は、自嘲の心境を詠まれたものと思うが、山上宗二の歌は逆境にあっても「上洛仕<sup>つかまつる</sup>」ことを考えながら万一、死去の後には「執心之御弟子ニハ可<sup>レ</sup>有<sup>ル</sup>御伝者<sup>者</sup>也」、あるいは「於<sup>レ</sup>有<sup>ル</sup>執心ノ輩<sup>者</sup>、志被<sup>レ</sup>御覧届可<sup>レ</sup>有<sup>ル</sup>御相伝<sup>者</sup>也」という希望がこめられている。

宗二は、皆川山城守に伝書(『山上宗二記』)を贈った翌月の、天正十八年四月十一日、小田原において四十七歳の生涯を終えた。ちなみに宗二が「遠浦帆帰 北条殿に在」と記し

と記している。

『宗二記』には玉瀾八幅の内「遠浦帆帰 北条殿に在、其古ハ連歌師宗長所持、其後今川義元所持」と見え、相州小田原へ向かう前から宗二は小田原には名品もあり、茶の湯もあることを知っていた。北条氏の家臣、林阿弥宛「山上宗二記」(今日庵文庫蔵)奥書の日付は天正十六年戊子五月吉日付なので、五月には小田原に達していたことがわかる。しかし、平泉まで行ったことの確証はないようである。

小田原北条氏の重臣、板部岡江雪斎宛『山上宗二記』(酒井家本)の奥書に「此一冊拙子上洛仕候歟、死去仕候後者、執心之御弟子ニハ可<sup>レ</sup>有<sup>ル</sup>御伝者<sup>者</sup>也、仍印可状如<sup>レ</sup>件、天正十七年己丑二月」(返り点、筆者注)、北条氏に降っていた下野長沼城主、皆川山城守宛『山上宗二記』(尊経閣本)の奥書には「若拙子上洛仕候、死去之後者、於<sup>レ</sup>有<sup>ル</sup>執心ノ輩<sup>者</sup>、志被<sup>レ</sup>御覧届、可<sup>レ</sup>有<sup>ル</sup>御相伝<sup>者</sup>也、仍印可状如<sup>レ</sup>件、天正十八年庚寅二月吉日」(返り点、筆者注)、とあり、宗二はなおも「上洛仕」まつることを考えていたことが知れる。宗二は、最後まで故郷に帰る希望を失わなかったといえよう。すると宗二の

歌は、

住むところ求めかねつつ東さして  
行けば錦に猶もなりひら  
と詠んだ方がよいように思う。ご賛同を頂ければ有難い。

宗二の「住むところ」の歌には、類歌があるのではないかと『新編国歌大観』を調べてみたが見当たらなかった。「錦」を詠んだ歌では木々が紅葉した意味の「錦」は多く見えるが、「錦を飾る」という意味の「錦」を詠んだ歌は「親王將軍」といわれた宗尊親王の歌だけであった。

宗尊親王

錦

いかがせんにしきをどこそ思ひしに  
なき名たちきて帰る故郷

(『竹風和歌抄』)

都にのぼりてのち、錦を題にて

いかにせんにしきをどこそおもひしに  
なき名たちきて帰るふるさと

(『中書王御詠』)

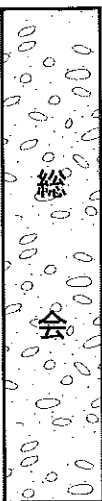
宗尊親王について『国史大辞典』に、次のように記される(抜粋)。

宗尊親王(仁治三年〜文永十一年(一二四二〜七四))。鎌倉幕府第六代將軍。中務

た「帆帰の絵」は、同年九月二十三日、秀吉の聚茶茶会に床の間にかざられた。

引用文献

- ①山下桂恵子「山上宗二記」を贈られた「宗程」年報『月曜ゼミナル』創刊号(月曜ゼミナル、平成四年一〇月)
- ②田中博美「翻刻 山上宗二記・武田家乙本」『山上宗二記研究 二』所収(財団法人三徳庵、平成六年三月)
- ③筒井絢一「山上宗二記を読む」(淡交社、昭和六十二年五月)
- ④「翻刻 山上宗二記」『堺衆―茶の湯を創った人びと―』所収(堺市博物館、平成元年九月)
- ⑤渡辺誠一「山上宗二の世界」(河原書店、平成八年一二月)
- ⑥皆川山城守宛、宗二伝書の日付は、「天正十八年庚寅二月吉日」と、「天正十八年庚寅三月吉日」とがある(五島美術館図録『山上宗二記 天正十四年の眼』)。(日高市在住)



本年度の総会を五月二日(日)一時半か



平成一七年事業計画

総会

日時平成一七年五月二二日(土)  
場所池坊短期大学

大会

日時平成一七年五月二二日(日)  
場所池坊短期大学  
内容研究発表・シンポジウム

研究会

第二二回  
台湾における茶関係施設見学・研究発表  
第二三回  
見学会を含めた内容で検討中

例会

東京例会(東京芸術大学一四時〜)  
四月二三日(土)  
生活と芸術研究会「『山上宗二記』に見え  
る銭屋宗納について」  
田中秀隆氏「『大正名器鑑』の利用法―紹  
鷗茄子、松本茄子などを例に―」  
五月二八日(土)  
高橋忠彦氏「銭椿年の『茶譜』と顧元慶の

『茶譜』

東郷登志子氏「岡倉天心『茶の本』の英語  
―「絵筆を持たない画家」の言語芸術―」  
七月九日(土)

吉野亜湖氏「All about tea」に見られる日  
本茶道の記述について」

竹内順一氏「茶会記に見る茶道具の寸法」  
九月一〇日(土)

佐藤留実氏「円覚寺の伝法衣と表装裂」  
吉岡明美氏「蔭涼軒日録にみる表装裂」  
十一月二六日(土)

下坂玉起氏「羽箒について」  
福良弘一郎氏「狂言と茶」  
もう一回開催の予定。

高知例会

四月二四日(日)土佐荘 一六時〜  
茶の湯文化学会創立十周年記念講演会をテ  
ーマとしたシンポジウム  
九月十一日(日)高知県文化財団埋蔵文化  
センター 一〇時〜  
高知県の埋蔵文化  
十一月一日(日)高知県立文学館慶雲庵  
茶室 一〇時〜  
シンポジウムと茶事  
二月二六日(日)高知県立文学館慶雲庵

茶室

大名家の茶の湯  
以上のほか高知県立文学館慶雲庵茶室にお  
いて茶席を設ける。

東海例会(名古屋文化短期大学 一八時〜)  
五月一三日(金)

朝日美沙子氏「田中訥言と復古大和絵」  
熊倉功夫氏「修学院離宮と後水尾院」  
七月二二日(金)

神谷昇司氏「玄々斎の建築(一)」  
名児耶明氏「定家様の尊重と小倉色紙」  
九月三〇日(金)

小川幹生氏「春正と名古屋」  
赤井達郎氏「近世の菓子」(仮題)  
十一月二五日(金)

内容未定

近畿例会(池坊短期大学 一四時〜)  
七月二三日(土)

岩井茂樹氏「茶道と恋歌―恋の掛物をかけ  
るとき」  
小林善帆氏「花の伝書に見る「花」と連歌」  
これ以降の実施については未定。

講演会

総会に引き続き、記念講演会を開催した。  
各要旨は次の通りである。

抹茶の効能

佐野満昭

茶には、香りや味などの嗜好性に関する成  
分とともに、抗酸化作用をはじめ、癌や動脈  
硬化、糖尿病、アレルギー疾患などに対する  
効果が期待される成分が多く含まれており、  
理想的機能食品であるといえる。特にカテキ  
ン類の効果は多岐にわたり、その総量は乾  
燥茶葉重量の一〇〜一八パーセントにもなる。  
それらカテキン類の中でエピガロカテキンガ  
レート(EGCG)といわれるカテキンの含量は  
最も多く、茶葉総カテキンの半分以上を占め、  
しかも他の野菜類にはほとんど含まれない特  
有のカテキンである。しかも、試験管レベル  
の研究においては、活性酸素消去などの抗酸  
化能の強さは、多くの植物成分の中では、最  
も強いレベルにある。

一般にカテキン類は活性酸素を減らすとい  
う認識が広まっているが、活性酸素の増加を  
止める働きがある。抗酸化酵素には、活性酸  
素をつくるものを抑えるものと作られた活性  
酸素を安定したものに変わるものがあるが、茶

に含まれる酵素は両方の働きをする。茶は抗  
酸化酵素の宝庫であるといえる。しかし、問  
題はカテキンの吸収率が一パーセント以下と  
悪いことであり、しかも吸収・排泄が早いこ  
とである。これは過剰な吸収を防ぎ悪い作用  
が起こるのを防いでいる。この酵素は、健康  
体に対してはそれほど働かないが、ストレス  
がおこったときなど異常時に働き、恒常性を  
保つという重要な働きをしている。

茶カテキンには、水溶性と脂溶性のものが  
ありアミノ酸のように一煎目で出てしまうと  
いうことはない。二煎目以降でもかなりのカ  
テキンが茶葉に残存している。特に「べにふ  
うき」や台湾系統の茶葉に多く含まれ、抗ア  
レルギイカテキンとして知られるメチル化カ  
テキンなど脂溶性の高いカテキンは、煮出し  
た場合茶葉に残存する率は高くなる。抹茶と  
して飲む利点の一つは、このような脂溶性の  
高い有効成分を丸ごと摂取することにある。  
ビタミンEやビタミンKなどの脂溶性ビタミ  
ン類は、煎茶ではなく抹茶として摂取するこ  
とではじめて利用することができる。

煎茶としてカテキンを摂取する場合と、抹  
茶としてカテキンを摂取する場合、腸管から  
の吸収の差が問題になるが、血中での検出量

には顕著な差が無く、抹茶としての利用は、  
カテキンや他の脂溶性成分の効率よい利用法  
といえるだろう。

近年ペットボトルの茶が大いに飲まれてい  
るが、この中のカテキンは半分以上が人工的  
なカテキンである。殺菌などの処理によって  
異性化が起きてしまう可能性があるが、これ  
までの機能性の研究は、自然の中でのカテキ  
ンを材料にして研究されてきた。人工的なカ  
テキンの場合作用がどのように変わるのか注  
意する必要があるが、近々その研究の結果が  
でるだろう。

高齢化社会を迎え、いかに健康を保てるか  
が問題であるが、スポーツなどできない高年  
齢者の場合、健康保持の多くを食べ物に依存  
せざるを得ない。茶は健康の増進に大いに役  
立つ。  
また、わが国での二〇歳から三五歳までの  
死亡の一番の理由は自殺だが、その原因はス  
トレスだとされている。茶は、そのストレス  
を和らげ安らぎを与える手段として、重要な  
役割りを果たしてきた。楽しみながら他種類  
の機能性成分を摂取することができるのが、  
茶の利点である。茶の機能性と精神性がうま  
く結びつけば、健康の増進に大いに役に立つ

と考えられる。

### 「桃山陶」再考

赤沼多佳

いま、国立博物館では陶磁器作品の時代区分を変えるという方向で検討が進んでいるという。関ヶ原の戦いが起こった慶長五年までを桃山時代とし、それ以降を江戸時代とするというのである。これは政治史の上では何の不思議もないが、陶磁史の上ではこれまでは一七世紀のもので、桃山時代という表記がなされてきた。明らかに慶長一〇年以降に焼かれた織部焼でも、桃山時代と表記されてきた。工芸史では政治が変わったとしても様式が変わるわけではし、桃山の気風を持っているということである。

しかし、創成年代の明らかでない陶器だけでなく、最近の考古学の発掘調査により、従来天正期に焼かれたとされてきたものが慶長期に焼かれたと強く主張されるようになっていく。これまで桃山期のものでとされてきた茶陶類特に美濃物の、瀬戸黒、瀬戸、志野はやはり桃山に始まったと考えて良いのではないが、茶会記の中では美濃で焼かれた茶陶、日本を代表する茶陶類は瀬戸焼きと呼ばれていたし、

天正の茶会記には多く出てくる。これをどう考えればよいのかという問題があり、これまでの時代区分に執着してきた。しかし、これにも矛盾があることには気づいていたので、考古学に従って分類しなおそうと考えた。そしてその気風を見てみようというところで、試行した。

天正期にできあがっていたことが明らかでない道具、利休の道具、長次郎焼、その他美濃、瀬戸を抽出した。残ったものでは魅力的な造形的に変化のある備前、信楽、美濃、織部やその影響を受けたものはその次に来る。そのように分けると明らかに方向性が見えてきた。利休時代はさておき、考古学の考え方に従うと、慶長二年以前大坂の大坂城の遺跡からは志野が出ないので、志野は慶長二年以降に作られたということになる。十数年考古学の考えは変わっていない。その説を打ち破る遺品は出ていないので、それに従わざるを得ないといま考えている。そして、備前であれ、美濃であれ、伊賀であれ、焼き、陶の中で造形的にデコラティブなもの、表面的に面白い物が関連性をもって浮き上がってきた。しかし、備前、信楽は、珠光の時代から茶陶として取り上げられていたし、備前は茶陶生産に入っ

が少しずれて文禄慶長期、特に慶長期に桃山の気風が円熟したのではないか。その気風は慶長元和まで茶陶の上では残っているように思える。その同じ時代に、寛永期に花咲く端正なもの、造形的には面白くはないが、菓や模様の上で表裏的に美しいものが作られるようになる。江戸の最初期には茶陶のうえで大きな変化があつたが、重層的な時代と考える必要がある。

桃山の気風を豊かに表現している志野、織部を見ていると、豊国祭礼図屏風に表現された慶長のエネルギーを感じる。美濃物の表現と屏風のエネルギーが重なっている。では天正期の茶道具はどんなものであつたのか。黒の手桶、釣瓶の水指、赤や黒の長次郎の静かな茶碗、唐物の茶入、唐物茶碗、高麗茶碗というものが天正期の道具の中心ではなかった。

### 理事会

本年度第二回目の理事会を、六月十八日(土)午後二時から、京大会館において開催した。本年度総会において役員の変更が行われたので、幹事を含めた拡大理事会として開催した。

いたので、分けて考える必要がある。趨勢としては、天正一四年から一六年頃茶陶として作られたものが文字資料に現れる。造形の方向性が出て来ると、それがより強調されていくような気がする。同じ窯でも、早期と最盛期と末期の作品の区別をする必要がある。各窯で焼かれたものをそういう考えで纏めてみると、一つの方向性があることがわかってきた。その理由は何かと考えたとき、関ヶ原の戦いのあとの茶の湯の中心地であった京都の町衆達の茶風が反映しているのだろうということになった。実に伸びやかな、実に力強い方向性が示されている。

そう考えてみると、これまで桃山陶の代表作といわれていたものが多くが、慶長二年以降の作品である枠に入れて矛盾が無くなる。天正期、文禄期、慶長期の面白い展開、その時代には桃山気風の残照としての茶陶とは異なる新しいものの出現がある。

それでは利休時代の茶陶はどんなものであったのか。利休が秀吉に示した生き方を考えてみると、極めて中世的な茶の在り方だったのでないか。茶道具から見ると、利休は極めて精神的なものに至ったという思いを深くする。天正期に培われた気風が、円熟した花咲いたの

倉澤会長の挨拶の後、議事に入った。すでに実施済みの事業について報告があり、審議に入った。役員の見直しについて、研究会の内容や幹事の補充について検討した(役割分担表については、次号に掲載の予定)。

### 発表者・会誌会報原稿募集

研究会・例会の報告は六〇分程度です。発表を希望される方は、事務局までご連絡ください。

会誌の原稿は、投稿規定をご覧の上ご投稿ください。会報の原稿は形式などにこだわらず投稿していただいてもかまいませんが、手直しなどをお願いすることがあることだけはご承知置きください。

### 例会の御案内

#### 東京例会

本年度第四回の例会を、九月一日(土)午後二時から東京芸術大学において開催します。

佐藤留実氏「円覚寺の伝法衣と表装裂」  
吉岡明美氏「蔭涼軒日録にみる表装裂」

#### 高知例会

本年度第二回の例会として、九月二日(日)午前一〇時から、高知県文化財団埋蔵文化センター・牧野植物園の見学を行います。交通費・昼食代として八〇〇円が必要ですが、参加希望の方は詳細を事務局までお問い合わせください。

また、次の日程で呈茶席を設けています。  
場所は高知県立文学館慶雲庵茶席、開設時間は一〇時から一六時までです。なお実費として三〇〇円が必要です。

- 九月四日(日)、一〇月二日(日)、
- 十一月六日(日)、十一月十三日(日)、
- 十二月四日(日)、十二月十八日(日)、
- 二月二十五日(日)

#### 東海例会

本年度第三回の例会を、九月三〇日(金)午後六時から名古屋文化短期大学アセンブリーホールにおいて開催します。

小川幹生氏「春正と名古屋」  
赤井達郎氏「近世の菓子」(仮題)

